小児外科　研修プログラム

１　研修先

小児外科

２　指導体制

各科・診療部門における指導体制は、別表「指導医及び指導者一覧」を参照

３　診療科基本スケジュール

（１）研修期間　　自由選択研修　４週間

※自由選択が１回目の研修は当該期間を短縮することはできない（延長は可）が、２回目以降の研修は短縮することができる。

（２）配置予定

	自由選択研修
病　棟	指導医の下で、入院患者の診察 （病棟診療が主な業務）
外　来	指導医の下で、外来、救急患者を適宜診察
検査・処置	担当患者の各種検査および処置を指導医と共に行う
手　術	担当入院患者の手術、周術期管理を指導医と共に行う
救　急	指導医の下で、時間内救急車対応

（３）週間予定表

	午　前 8：30		午　後 17：15	
月	回診	外来診療、造影検査	病棟業務、外来診療	回診
火	回診	手術	手術	回診
水	回診	外来診療、病棟業務	検査、カンファレンス	回診
木	回診	外来診療	手術	回診
金	回診	外来診療、造影検査	外来診療、造影検査、抄読会	回診

４　研修目標

医学知識と問題対応能力

小児の外科的疾患に対して基本的な知識と技能を持ち、診療、手術、術前術後管理を行いうる能力を習得する。

患児の病歴をとり、理学的所見を得る

診断治療に必要な検査を検討する

治療方針に関してプレゼンテーションを行う

診療技能と患者ケア

主として家族から身体的・精神的・社会的な背景も含めて適切に情報を収集する。特に周産期歴、手術歴含む既往歴、家族歴、家族背景、予防接種状況、健診状況等の確認。

患児である新生児、乳児、幼児、学童等に対して年齢と病態に応じた話しかけと診察を行う。

疾患と年齢に応じた検査プランを作成する。鎮静を要する検査は患児に必ずつきそう。

集めた情報を元に治療方針を上級医と検討する。

手術治療に参加し、手術の助手を務める。
術後管理を上級医とともに行う。外来再診時にはともに診察する。

小児は成人のミニチュアではないので各年齢における小児の身体的特徴をよく理解した上で研修することが大切である。

日常的にカンファレンスの発表者となる。

5　経験すべき症候、疾病、病態　（赤文字下線付きは必須項目）

経験すべき症候(※1)	下血・血便、腹痛、便通異常（下痢・便秘）、熱傷・外傷、成長・発達の障害
経験すべき疾病・病態(※2)	肝炎・肝硬変

※1　外来又は病棟において、上記の症候を呈する患者について、病歴、身体所見、簡単な検査所見に基づく臨床推論と、病態を考慮した初期対応を行う。
※2　外来又は病棟において、上記の疾病・病態を有する患者の診療にあたる。

(1)　経験すべき検査・治療処置

1）基本的検査

腹部超音波検査

X 線検査：単純撮影、消化管造影、尿路造影

生検：リンパ節、体表組織、直腸、腎

2）特殊検査

CT 検査、MRI 検査、消化管内圧検測定、24 時間胃食道 PH モニタリング、直腸粘膜生検、手術標本組織検査

3）基本的治療処置

あらゆる時期・病態の小児の術前・術後管理：水分電解質管理、呼吸循環管理、体温管理、酸塩基平衡管理、感染防御、栄養管理

4）その他治療処置

蘇生法その他の救急処置、外傷・熱傷の初期治療、圧迫止血法、創部消毒とガーゼ交換、ドレーンやチューブ類の管理、静脈注射法、末梢静脈確保、経鼻胃管挿入、導尿カテーテル挿入、肛門拡張術、外そけいヘルニア嵌頓用手整復術、腸重積非観血的整復術、皮膚縫合、そけいヘルニア手術

6　経験すべき手技

圧迫止血法、包帯法、採血法（静脈血）、注射法（皮内・皮下・点滴・静脈確保）、導尿法、ドレーン・チューブ類の管理、胃管の挿入と管理、局所麻酔法、創部消毒とガーゼ交換、簡単な切開・排膿、皮膚縫合、動脈血ガス分析（動脈採血を含む）、心電図の記録、超音波検査（腹部）

7　実際の業務

小児の外科的疾患に対して基本的診療を行いうる知識と技能を習得する。
指導医の下で、入院患者の診察を行う。
指導医の下で、外来、救急患者を適宜診察および介助を行う。
担当患者の各種検査および処置を指導医と共に行う。

担当入院患者の手術助手となり、周術期管理を指導医と共に行う。

8　指導内容

小児外科診療に必要な下記の基礎知識･病態・に習熟し、臨床応用できることを目指す。

⑴ 局所解剖および発生：手術をはじめとする小児外科診療上で必要な局所解剖およびその発生学について述べることができる。

⑵ 病態生理：①小児の正常な生理機能について、発達段階に応じて理解している．②周術期管理や集中治療などに必要な小児の病態生理を理解している．③手術侵襲の大きさと手術の危険性を判断することができる。

⑶ 輸液・輸血：周術期・外傷患児に対する輸液・輸血について述べることができる。

⑷ 小児栄養・代謝学：①病態や疾患に応じた必要熱量を計算し、適切な経腸栄養剤の投与・管理や経静脈栄養を適切に施行管理することができる．②外傷や手術などの侵襲に対する小児の生体反応と代謝変化を十分に理解できている。

⑸ 感染症：①臓器あるいは疾患特有の細菌の知識を持ち、臓器移行性などに考慮して抗菌薬を適切に選択することができる．②術後発熱や炎症反応の上昇の鑑別診断ができる．③小児における抗菌薬による有害事象を理解できる．④小児期特有の感染症の症状･治療･予防について理解している。

⑹ 周術期管理：新生児・乳児・小児の各年齢に相応した病態別の検査計画、治療計画を立てることができる。

⑺ 学術研究の目的または直面している症例の問題解決のため、資料の収集や文献検索を独力で行うことができる。

9　方略、評価

小児の外科的疾患に対して基本的な知識と技能を持ち、診療、手術、術前術後管理を行いうる能力を習得する。

日常的にカンファレンスの発表者となり、討論に参加する。

1） 問題志向型システム・科学的根拠にもとづいた医療を実践することができる。
2） 診療記録とプレゼンテーションを正確に行うことができる。
3） 手術適応である理由、術前の評価を理解することができる。
4） 手術術式を口頭で述べることができる。
5） 手術の助手をつとめることができる。
6） 術後管理の要点、今後の患児の経過を述べることができる。
7） 直面している症例の問題解決のため、資料の収集や文献検索を独力で行うことができる。

以上の研修終了後、指導医、メディカルスタッフから評価、フィードバックを受ける。